

# 後藤新平伯伝記編纂会 ～人間再現の新史伝誕生～

## 【初版の序】

【天真会員並びに伝記編纂会発起人名簿】➡

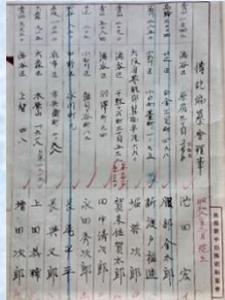
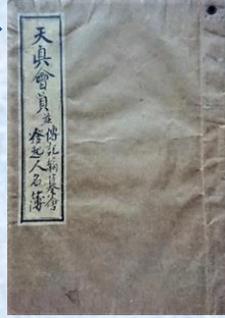
後藤新平死去の翌年昭和5(1930)年4月8日、天真会(後藤伯追憶の会)の席上にて後藤伯の伝記編纂のことが議題に上った。



その後、東京市政調査会内に仮事務所を設置し、各団体や天真会と会合を重ね、趣意書ならびに規約を議定した。昭和6年4月4日、会長に斎藤實、顧問に伊藤巳代治・石黒忠恵・犬養毅・若槻礼次郎・阪谷芳郎を推し、同時に池田宏・新渡戸稲造・永田秀次郎・長尾半平・長与太郎・児玉秀雄等12氏が理事に選ばれてようやく陣容が整い、趣意書の配布・寄付金の募集・その他の活動を開始することとなった。

これより先、編纂会は、東京日比谷の市政調査会に事務所を置き、編纂の準備に着手したのであったが、後藤伯邸より数千部の蔵書とともに、二百数十捆の膨大なる資料が届けられるに及んで、伝記編纂の仕事も、ようやく軌道に乗るに至った。昭和7年2月、編纂会は新たに池田・新渡戸・賀来・田中・永田上田の6理事並びに、岩永裕吉・田島道治・鶴見祐輔・前田多門・清野謙次・菊池忠三郎の6氏を編纂委員に詮衡し、同時に伝記の執筆は、故伯の女婿鶴見祐輔氏に依頼することとなった。

以来、時を経る2年有半、昭和10年の初夏に至って、鶴見氏はほぼ伝記を脱稿せられた。一方、編纂会においては、各編纂委員その他の厳密なる校閲に付して、万全を期した。かくしてついに第一巻を世に送り、故伯の第九回忌にあたって、これを墓前に捧ぐるを得ることとなった。 昭和12(1937)年3月10日 《後藤新平伯伝記編纂会》(要約)



令和四年度 第三回企画展

## 後藤新平伯伝記編纂会

人間再現の新史伝誕生

【併催】シリーズ後藤新平人脈考⑨  
「鶴見祐輔」

開催期間: 令和4年12月16日(金)~令和5年3月12日(日)  
奥州市立後藤新平記念館

## 【編著者の詞】

ことば

(前略)余はここに筆者として、余が本伝記執筆に際し取りたる態度を明記し置かんと欲する。



余は最近30年、世界に起こりきたりしいわゆる新史伝の愛好者である。すなわち新史伝は、主人公の人格発展を描写することを主眼とし、外界の事件と現象とを中心として取り扱わない。しかしながら史伝たるがゆえに材料はことごとく事実でなければならない。この点において史伝は科学である。しかれども、同時に史伝にして年代記にあらざるがゆえに、あくまでも伝中の主人公の人間としての姿を見失ってはならない。その人間を紙上に再現することが新史伝の目標である。ゆえにこの観点よりすれば史伝は文学である。余が編纂会より委嘱せられたるは「読めるような正伝」ということであつた。それは乾燥無味なる年代記の体を避けて、人間再現の新史伝たるべしとの注文であつたと余は了解した。ゆえに余は本伝記においては、上述するがごとき趣旨をもって記述した。

余が本伝記執筆に際して努めて避けんと欲したるは、第一に、主人公の賛美過褒であり、第二に官庁出版物に類するがごときいたずらなる記録の堆積であつた。ゆえに余は必ずしも故伯を完全無欠なる理想的人物としては描かなかつた。また余は故伯の業績と同様の重要性を伯のささいなる言動逸話に認めた。もとより余の菲才その志を果たし得たりと称しない。ただ志はこのところに存したりというのである。(中略)故伯永眠後、満八年の命日に、この書の第一巻を靈前に捧ぐることを得るは、余が衷心の満足である。

昭和12(1937)年3月15日 《鶴見祐輔》

## 【粗材整理規準表】

## 【役員会記録・給与関係】

## 【編纂会日誌(全4冊)】

## 【後藤新平(全4巻)初版】

